

事例報告 2

津久井城跡(本城曲輪群地区)

(公財)かながわ考古学財団 調査研究部
企画調整課 相良英樹

1. はじめに

津久井城跡は、神奈川県相模原市緑区に所在し、JR 横浜線橋本駅の西方約7 km に位置する。津久井城跡が位置する城山は北側を相模川、南側を串川及びその支流の目久尻川に挟まれた丹沢山地の東端の山塊である。相模川が大きく西に屈曲する



第1図 既調査地点位置図

この地は古くから甲斐と相模・南武蔵との交通の要衝であった。

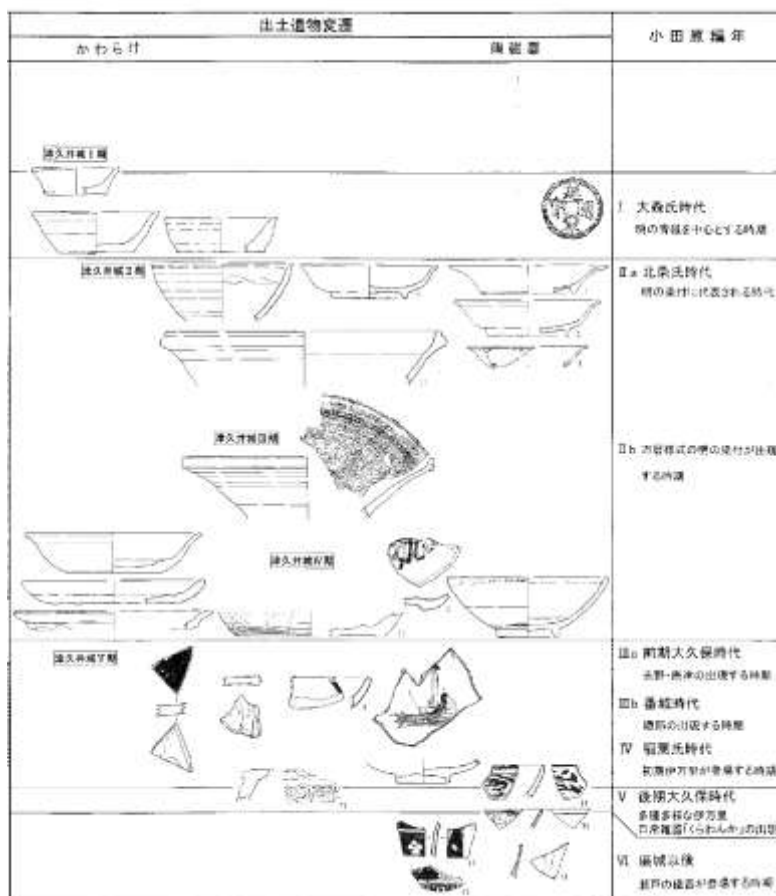
津久井古城図などを参考に城山の山塊を分類するなら、東側から飯縄曲輪群、太鼓曲輪群、本城曲輪群に分けられる。財団が3次に渡って調査を行った本城曲輪群は、3つの曲輪群の中でも最も標高の高い地点に位置する。

2. 遺跡の歴史的環境

津久井城のはじまりは、江戸時代に編纂された『新編相模国風土記稿』によれば、鎌倉時代まで遡ると言われる。確実な史料によれば、津久井城主は大永四年(1524)、津久井城に関する史料は大永五年(1525)が初出である。この頃には内藤氏が津久井城の城主と考えられる。内藤氏は扇谷上杉氏や武田氏とも関係したと言われるが、最終的に後北条氏に帰属したことが史料から窺える。天正十八年(1590)の豊臣秀吉による小田原攻めの際に津久井城も落城したと記録されている。徳川家康が幕府を開いた後、津久井地域は幕府直轄地となり城山も天領となった。一時、久世氏の私領となるが、20年ほどで再び天領となり、以後、明治まで天領として存続した。津久井城山頂部が近世以降どのような取扱いを受けたか不明であるが、麓の根小屋村名主により、山頂部に「津久井古城記」の石碑が建立されている。

3. 発見された遺構と遺物

本城曲輪群地区では、礎石建物址1・石組遺構8・石列遺構20・石敷遺構7・階段状遺構1・礫集中17箇所が発見されている。礎石建物址は本城曲輪の北東隅で検出された。直径40cm程度の円礫4石から成り、柱間距離は間口2.7m、奥行き90cmを測る。本城曲輪への出入り口部分と推測される箇所であることから、門跡と考えられる(第6図)。石組遺構は形態から側石、側石+底石、側石+底石+天井石の3タイプに分類出来る。傾斜をつけ、通路部分に沿う形で設置されていることから、排水施設であったと考えられる。石敷遺構は虎口や城門と考えられる箇所に集中している。礫集



第2図 津久井城御屋敷跡出土遺物変遷図

中箇所はこれまでの調査から曲輪のいたるところで確認されているが、特に虎口に堆積した状況が注目される。礫に混じって遺物も出土しており、自然崩落に伴う堆積ではなく、投げ込み等、人為的行為の可能性が考えられる。

山頂部を削平し曲輪を造成する中で、埋め立てや地盤改良を行っていたことが明らかとなった。「土蔵」曲輪からは、石組遺構の約50cm下から別の石列遺構が検出されたことで、複数時期の地業面があることが確認された。また、同じ曲輪からは石組(石列1)で囲まれた長方形部分からは砂礫を充填し、地盤を固めた地業を観察することが出来た。

石敷遺構や階段状遺構に使用された石材は山麓からも産出される砂岩(角礫)の他、相模川の河原で観察される凝灰岩や富士玄武岩等(円礫)などがある。石敷遺構でも場所によって上記の石材を使い分けて使用していたようである。使い分けの理由についてははっきりしないが、普請時期の違いや機能差による石材選別の違いが考えられる。

出土遺物は近世および中世の遺物の他、わずかであるが奈良・平安時代に遡る遺物も見つかった。中世では陶磁器、かわらけが出土しており、中でもかわらけの出土が一番多い。磁器は青花磁器皿等、舶載磁器が出土しているが量はわずかである。陶器では壺・甕類や茶道具等がある。

陶器の産地としては瀬戸・美濃、信楽、常滑、備前窯の製品が認められ、周辺の八王子城とも類似した様相を呈している。かわらけにはロクロ成形の厚手製品と手づくね成形の薄手製品がある。薄手製品は「小田原のかわらけ」と呼ばれており、北条氏の本拠地の他、北条氏に関連する城館においても出土している。表面に付着物が認められるかわらけも数点出土しており、科学分析の結果、^{うるし}漆と鉛入りの青銅に由来した結果が出ている。このことから、かわらけを漆容器やとりべとして使用したことが窺える。金属製品では釘、^{こづか}小柄などの建築用品や武具の他、火打ち金も出土した。

近世の遺物では肥前磁器や銭（寛永通宝）などが出土した。先の「津久井古城記」の石碑建立に見られるように、山頂部への一定の人の出入りがあったことを示唆する。奈良・平安時代の遺物では土師器や須恵器、瓦が出土した。古代の遺構が山頂部に存在した可能性もあるが、これまでの調査においては確認されていない。

平成 21 年度の調査では米曲輪から炭化材の集中した箇所が見つかり、土壌水洗を行った結果、炭化した種実が出土した。有用植物としてはイネとマメ科の種子が認められる。近隣の八王子城においてもイネおよびマメ類が出土している。

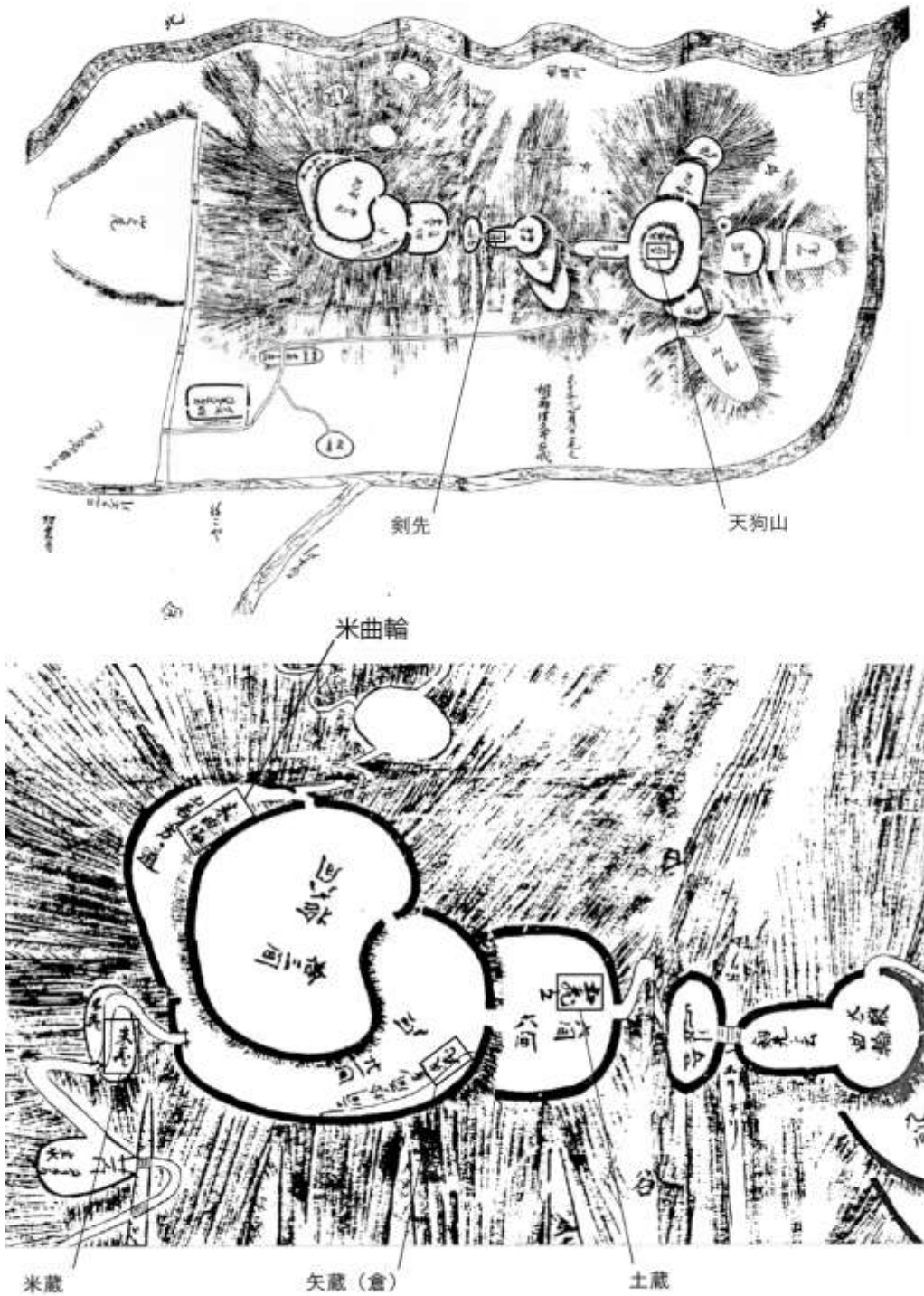
4. まとめ

平成 20 年から平成 22 年まで、3 次に渡る調査を行った結果、山頂部曲輪の構造をある程度把握することが出来た。石敷遺構・石列遺構などの分布状況から、折れを多用した通路および虎口の構造を一部把握することが出来た。「米蔵」曲輪から本城曲輪まで直進で 50m 程度の距離であるが、通路に沿った場合 150m の距離を測る。また、石敷遺構の一部には幅が狭い箇所あり、防御を意識した構造と言える。石組遺構は 8 箇所確認されており、曲輪の維持を目的とした排水施設と考えられる。調査を行った虎口は 4 箇所あり、すべてにおいて礫の堆積が認められた。角礫や円礫、遺物が混在して出土した状況から、廃城に伴う破却行為の一部と考えられるが、部分的な確認に留まっている。

出土した遺物の多くは中世後半に属する。礎石建物址の検出や角釘の出土によって、構造物が存在したことが裏付けられた。その他、金属滓（鉛入り青銅）の付着したとりべの分析結果は弾丸等の武器製作が山頂部において行われた可能性を示唆する。かわらけに付着した漆の利用目的については明確ではないが、武器・武具に関わる遺物が出土したことを考慮すれば、武具等の修繕に用いられたことが考えられる。

引用・参考文献

- 加藤勝仁・相良英樹 2009 『津久井城跡（本城曲輪群地区）』 かながわ考古学財団 239
- 相良英樹・上村和直 2010 『津久井城跡Ⅱ（本城曲輪群地区）』 かながわ考古学財団 246
- 相良英樹・井関文明 2011 『津久井城跡Ⅲ（本城曲輪群地区）』 かながわ考古学財団 261
- 近藤英夫・野口浩史他 2001 『津久井城の調査Ⅴ』 津久井城遺跡調査会・津久井城遺跡調査団
- 津久井町史編集委員会 2007 『津久井町史 資料編 考古・古代・中世』

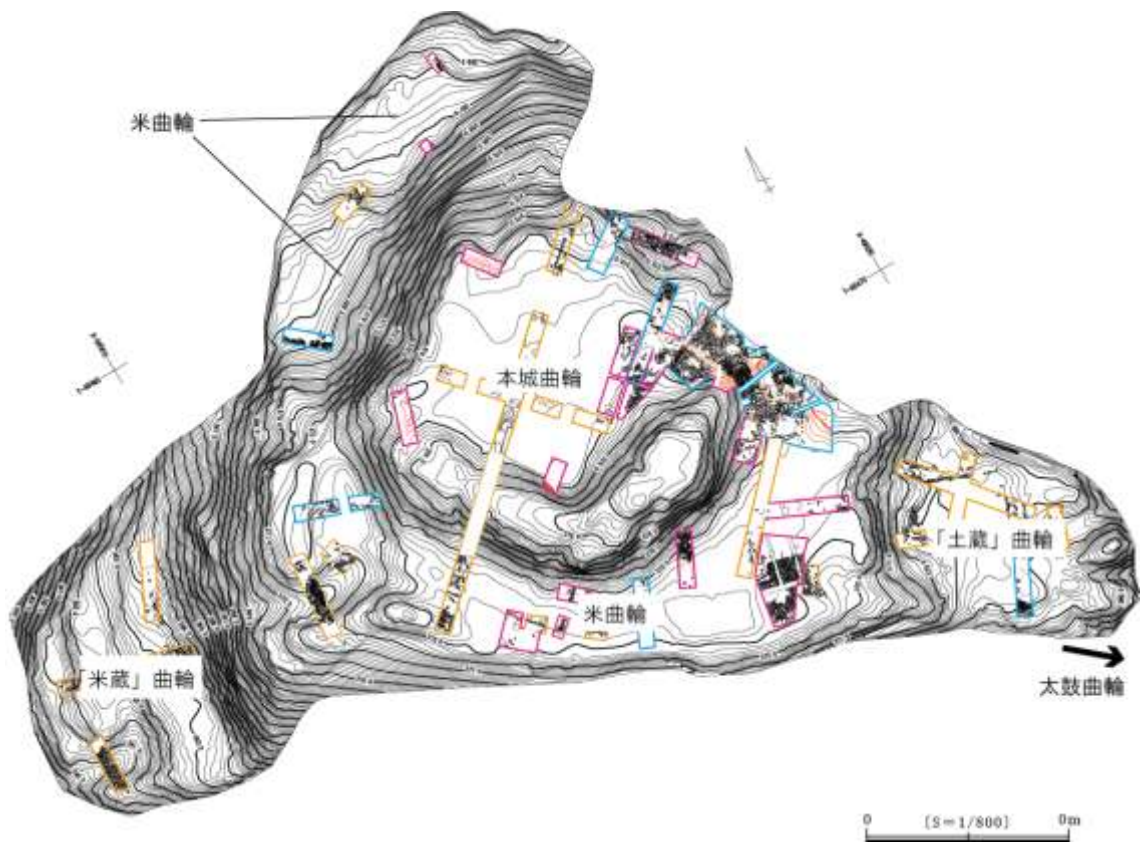


『相州津久井古城図』慶安元（1648）年

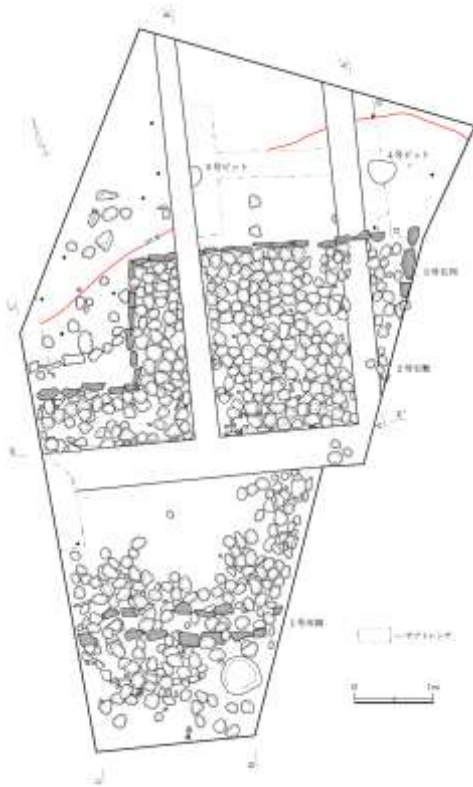
上：古城図全体図

下：本城曲輪部分拡大図

第3図 津久井古城図



第4図 本城曲輪群地区全体図



第5図 米曲輪2号石敷遺構



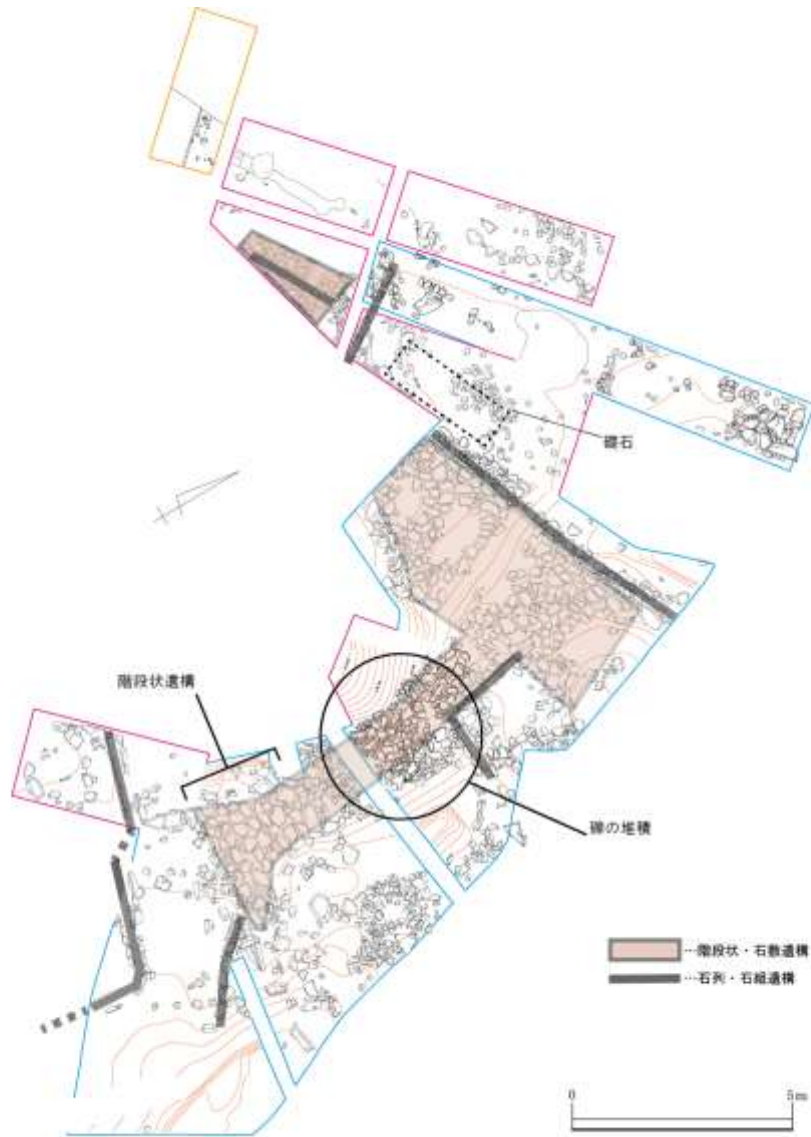
写真1 米曲輪2号石敷遺構検出



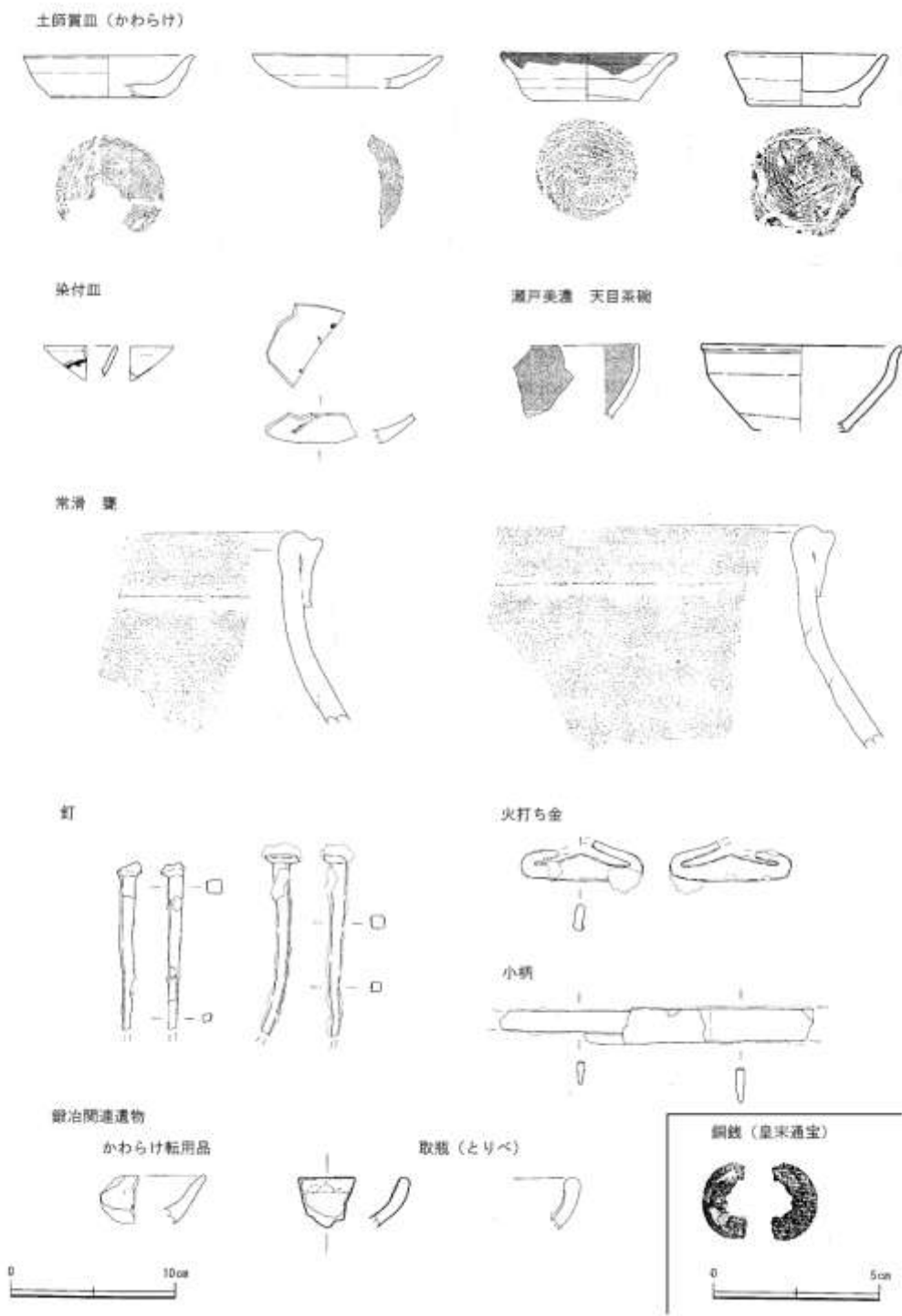
写真2 本城曲輪礫堆積状況



写真3 本城曲輪礎石検出



第6図 本城曲輪虎口周辺遺構



第7図 本城曲輪群地区出土遺物



写真4 米曲輪虎口礫堆積状況



写真5 「土蔵」曲輪石列遺構



写真6 米曲輪石組遺構



写真7 米曲輪石列遺構



写真8 本城曲輪礫堆積内遺物



写真9 平成21年度調査出土遺物